

チャンス・チャレンジ・チェンジ



秋田県立支援学校天王みどり学園 加賀谷 勝

2つの誤解?



1 「どちらが良い子？」

3歳の優介君が楽しそうにおもちゃで遊んでいたとき、遼君がやってきて「おもちゃ、貸して」と言った。しかし、大好きなおもちゃに夢中の優介君は貸そうとしなかった。

あなたは優介君にどのように声を掛けますか。

ほとんどの大人は、優介君は良い子だからと言いついて聞かせて、遼君におもちゃを貸すように促すのではないだろうか。あるいは、自分から貸せる思いやりのある子になってほしいと期待するのではないか。果たして、それが本当に良い子だろうか？

おもちゃは優介君にとって大切なものなので、すぐに「いいよ」とは言えない。むしろ、「今、僕が遊んでいるから貸せない」と、自分の気持ちを押し込めるのではなく、素直に伝えられる方が大事ではないか。思いやりとは、他者の気持ちを理解して行動することである。しかし、その前に自分の感情（うれしい、悲しい等）を表情や言葉、行動で表現できることが先である。それが土台となり、他者に対する感情（思いやり、かわいそう、助けてあげたい等）が構築されていく。周囲の人や親の期待に応えるだけの子ども（小さな大人）に育ててはいけない。

優介君が納得して貸してあげたとき、あるいは、少し時間が経過してから貸してあげたときには、良かった行動を具体的に言葉にしてほめることで、思いやりの気持ちが育つ。

辛いことがあっても表情に出さず、辛いと感じない姿を見せる子どもが我慢強い子と誤解されている。自分のポジティブな感情もネガティブな感情も素直に表現できる子どもを育てたい。良く泣き、良く怒り、良く笑う子は、我慢する力も育まれる。



2 「しつけ=叱ること？」

小学6年生の子どもに、「夜に友達同士で遊びに行きたい」と言われた。夜は危険がいっぱいなので、とても心配である。「ダメ！」と言えば、子どもが暴言を吐くかもしれない。

あなたはどのように対応しますか。

- ①「子ども同士で遊びに行くのはわがままで！」と、行きたい気持ちごと悪いことだと厳しく叱る。
- ②「夜9時までには帰ってくる」「携帯電話で連絡して」と言いながら枠を崩して妥協する。
- ③「友達と遊びに行きたかったんだ、今日は残念」と言いながら「夜に友達だけで遊びに行かれない」と静かに伝え、落ち着くまで待って我慢したことをほめる。

①は、子どもの感情の存在を否定する対応であり、一般的なしつけと理解される。しかし、一方的に叱りつけると、子どもはネガティブな感情を表に出さなくなる。②は、妥協策で子どもよりも自分の不快感を収めることを重視した対応である。子どもにネガティブな感情を体験させるチャンスを奪ってしまう。③は、子どもの気持ちを大切にしながら、しつけの枠組みを崩さない対応といえる。

しつけは、家族や周りの大人が期待していることを、子どもが自主的に動けるよう教えていくことであり、子どもを守るためにある。しつけとは、大人が子どもを愛することである。多くの人は、「しつけは叱ること」と認識しているため、虐待としつけは紙一重になりやすい。③の対応はとても難しいが、長期的には、子どもは自分は守られていると感じ、大人になることができる。

学級でも子どもに枠組みを明確に提示することが必要である。しかし、発達の違いの子どものは、それを守ることが難しい。例えば、授業中に離席する子どもに対しては、頭ごなしに叱るのではなく、「～になったら、出る（戻る）」と、事前に教室を出るときや戻るときを取り決めをしておく。子どもの気持ちに共感しながら、特性に即した柔軟なルールと、時には譲らない態度も必要となる。さらに、大切なことは対象児の変容だけでなく、周りの子どもも変えていくことと、子どもとの信頼関係を築くことである。最も早く信頼関係を築く方法は、子どもに「良い言葉を笑顔で伝えること」である。

